

## ローマ地下共同墓地における〈殉教者崇敬〉

山 田 順

### 問題提起

キリスト教美術の誕生は、地下共同墓地（カタコンベ）を抜きには語れない。考古学領域である地下遺跡から出土する、墓や墓室に描かれた素朴なフレスコ画は、迫害に苦しめられた2世紀から4世紀初めまでのキリスト教と、ミラノ勅令（313年）を経て国家権力との関係を深めて行く新たなキリスト教との両方の姿を映し出しており、興味深い。とりわけ、カタコンベの壁画に頻出していたキリストと信徒の素朴な関係のモチーフ〈善き牧者キリスト〉の像が、玉座に着座し使徒たちを従えたキリスト権威図像によって駆逐されていく様は、キリスト教そのものが〈権威化〉し大きく変容して行く当時の状況と並行関係にある。

筆者は、ここ数年間の研究のなかで、〈善き牧者キリスト〉像が、なぜ、キリスト教美術の歴史のなかから消失してしまったのか、この〈消失問題〉の解明をめぐる、主にカタコンベ内部の4世紀の層に残された図像学的・考古学的変化の痕跡を、実際に現地を踏査しながら追いつけてきた<sup>1)</sup>。なぜなら、キリスト像の〈権威化〉を一般論として語るのは容易いが、その〈権威化〉が実際にどのような形で平信徒のもとまで入り込み、彼らが抱いていた素朴な羊飼いととしての〈救済者〉のイメージを変容させるに至ったのか、そのプロセスが実証的に解明されなければ、その歴史的・図像学的現象の意味を真に理解したことはないからだ。

この〈消失問題〉に関して、これまでの筆者の研究から見てきた重要な要素のひとつは、ミラノ勅令直後に、主に皇帝やその親族の寄進によって地上に

出現した巨大なキリスト教礼拝施設（聖堂）の存在である<sup>2)</sup>。この第一世代の聖堂建築内部で、間違いなく皇帝美術などの影響を受けながら形成されたキリスト教図像言語の新たな〈文法〉が、比較的裕福な信徒層を介して、地下葬礼領域の奥深く、彼らの墓室内部にまで導入された可能性は高い<sup>3)</sup>。実際に、カタコンベの4世紀後半以降の層の墓室には、地上の聖堂内部を模したようなアプシスなどの高度な建築要素の再現や、壁画図像の上下関係といった新たな図像学的〈ヒエラルキー〉が出現している<sup>4)</sup>。

しかし、このようなキリスト教とローマの皇帝との接近関係から考えられるキリスト図像の〈権威化〉の要素に加えて、もうひとつ、4世紀のローマ社会のなかで急速にその勢力を拡大していたキリスト教教会当局に起因する〈権威化〉の要素もまた、見逃してはならない。なぜなら、埋葬と墓参を中心とした素朴な地下墓所にすぎなかったカタコンベが、過去の殉教者の墓を核とした一大〈巡礼聖地〉へと変容を遂げて行くその背景には、ローマの教会当局の様々な思惑が見え隠れするからだ。とりわけ4世紀のカタコンベと深い関わりをもっていたローマの司教としては、まず、第一に、ダマスス（在任366-384年）の名があげられる。ダマススは、一般信徒の間に早くから存在していた殉教者に対する祈願や信心を教会当局として初めて公式に儀式化した人物で、カタコンベの殉教者の墓を整備し、そこに彼らの信仰を称える頌詩碑文を献じたことで知られる。

本稿では、ローマのカタコンベの4世紀の層に残された、このような教皇ダマススのいわゆる〈殉教者崇敬〉にかかわるプロジェクトの具体的痕跡を拾い集めながら、その全体像を確認する<sup>5)</sup>。そして、その出来事を、〈善き牧者キリスト〉像の消失とキリスト図像の〈権威化〉という図像学的視点と文脈から捉え直しながら、ローマ教会当局が行った「政策」の新たな意味を考察する。

## 1. 教皇ダマスと〈殉教者崇敬〉

教皇ダマスは、ヒエロニムスと共に完訳ラテン語聖書（ウルガータ）の出版に着手した偉業でも知られるが、そのローマ司教在任中は決して平穏なものではなかった。すでにダマスの前任者リベリウス（在任352-366）の時代から、主にアリウス論争を火種に対立教皇フェリクス二世が擁立され、ローマ教会は大きな分裂の危機にあった。リベリウスの後継として選ばれたダマスに対しても、反対派によって対立教皇ウルシヌスが擁立され、教会分裂の事態はさらに悪化していた。歴史家アミアヌス・マルケリーヌスの記述によれば、両者の対立はローマ市街での暴動にまで発展し、ウルシヌス派側に137名もの死者がでたという<sup>6)</sup>。

このような教会内部の分裂の危機をあらゆる手を尽くして治めながら、同時に、アリウス派、マケドニウス派、ドナトゥス派などの諸派を異端として排除し、ローマ教会に正統信仰に基づく統一と調和をもたらすこと、それが教皇ダマスに求められた急務であった。さらに、当時、首都としての機能を失い衰退して行く都市ローマに比して、確実に政治的・宗教的重要性を増していた新都コンスタンティノポリス、そして、ミラノといった競合勢力を前に、ダマスにはローマ司教座の変わらぬ優位性（首位権）を主張し、それを確たるものとする重要な使命があった。事実、彼は、382年にローマ教会会議を開催し、ローマ教会は全教会の首座であり、その〈首位権〉はキリストがペテロに委ねた権能に基づくものであること、すなわち、ローマ司教が使徒ペテロの後継者であることがその根拠となっていることを初めて明確に宣言している<sup>7)</sup>。

したがって、カタコンベに埋葬された殉教者への頌詩碑文の献呈など、教皇ダマスが行った一連の〈殉教者崇敬〉プロジェクトの背景には、そのような彼が直面していた教会論的・政治イデオロギー的問題が重要な動機のひとつとして存在していたことは想像に難くない。すなわち、過去の殉教者の墓を〈再発見〉し、〈正しい〉信仰に基づく彼らの殉教死の意義と価値を称揚することで、教会内的には、増え続ける新たな改宗者たちに異端に惑わされることのない

い信仰の模範を示し、教会の分裂を回避することを望んだ。一方、対外的には、ヴァティカーヌスの丘に埋葬されたとする使徒ペテロを筆頭に、ローマに数多く点在する殉教者の墓の存在を根拠に据えながら、ローマ教会の正統信仰の系譜と優位性を正当化し、その歴史的継続性の論拠を強化しようとしたものと考えられる。

教皇ダマススが行った〈殉教者崇敬〉プロジェクトに関しては、『リベル・ポンティフィカーリス』をはじめ、彼自身による碑文のなかに、また、後の教皇たちが残した記録のなかにその記述を見つけることができる<sup>8)</sup>。それによれば、ダマススは、まず、その事業を開始するにあたって、ローマの殉教者たちに関する個々の殉教の出来事を再構築するための情報収集から始めている<sup>9)</sup>。その際、墓の場所が忘れ去られているものについては、場所の確定のための調査も行ったという。また、地下の殉教者の墓へのアクセスが困難になっている場所では、大規模な改修工事も行っている。東ゴートのウィティギスによるローマ急襲（537年）の際に破壊された殉教聖人の墓の再建を行った教皇ウィギリウス（在任537-555）は、その再建を記念する碑文のなかで、ダマススの偉業について賛辞を残している<sup>10)</sup>。それによれば、ダマススは殉教者の墓に、神の啓示を記憶するための頌詩を据え、彼らが正当に崇敬されることを望んだ<sup>11)</sup>。

## 2. 〈視覚メディア〉としての頌詩石碑

382年から3年間ローマに滞在し教皇ダマススと親交のあったヒエロニムスは、その著書『著名者列伝』(*De viris illustribus*)のなかで、同教皇が、古典的な英雄叙事詩の詩体〈ヘクサメトロン〉(六脚詩)を用いて巧みに詩作を行う優れた文学的才能を有していたことを記している<sup>12)</sup>。ダマススの作品は、実際に彼が大理石板に刻ませた石碑の出土断片そのものを通して、あるいは、ロルシュ文書(*Codex Laureshamensis* : 9-10世紀)やトゥールの写本(*Turonensis* : 12世紀)、ヴィルトゥスの写本(*Virdunensis* : 7-9世紀)など、主に7-12

世紀までの写本を通して60点余りが今日に伝えられている。そのうちの約30点がローマの殉教者に献呈された頌詩碑文として確定されており、それらは、ほぼ370-383年の間に、ダマススおほかえの能書家であったフリウス・ディオニシウス・フィロカルスによって大理石板に刻まれ、ローマのカタコンベの殉教者の墓やその記念の場所に設置されたものと考えられる<sup>13)</sup>。

殉教者の墓に設置されたダマススの頌詩石碑は、どれも、高さ1~1.5メートル前後、横幅は2~2.5メートルほどの大きなものであったと推測される(図1)。このような石碑板に刻むためにフィロカルスによって採用された石碑文字の様式は、水平線には細い刻線を、垂直線には太い刻線をもちい、また、傾斜線は左から右に向かう上昇線を細く、対して、下降線は太く刻み分けながら文字の線影をより鮮明にリズミカルに強調している(図2)<sup>14)</sup>。また、特定の文字(D, G, H, M, N, O, Q, R, T)を他の文字より意図的にやや幅広く刻むことで、碑文全体の文字バランスを整えながら同時に視覚的アクセントが生み出されるよう工夫されている。さらに、作品によっては、文字の垂直線の上下端を丸く隆起させ、そこからひげ状の装飾曲線を左右に広げ、文字に柔らかで華麗な装いをもたせるなど、その装飾性にまで配慮されている。

ローマのカタコンベや聖堂内部から発見された教皇ダマススの頌詩石碑の断章・断片は、どれも、このようなフィロカルスの手による特徴的な文字で刻まれており、その細部にまで配慮され洗練された石碑文字の美しさは、同時代のキリスト教領域では他に類を見ない。研究者の間でも〈フィロカルス文字〉の名で知られるこの石碑文字に詳しいC.カルレッティは、文字のもつ特徴とそれによって構成された石碑全体が示す強い印象は、地下の墓や墓室、聖堂といった薄暗い空間のなかでも人々の目を素早く引き付け、ダマススの頌詩を的確に、そして容易に読解させるために戦略的に熟慮された結果であると指摘している<sup>15)</sup>。

また、キリスト教碑銘研究の大家であったA.フェルーアは、大型の石碑と碑文文字に関する文化がすでに斜陽化していた4世紀後半という時代にありながら、フィロカルスは、古代ローマの石碑石工と能書家の優れた伝統技術を見

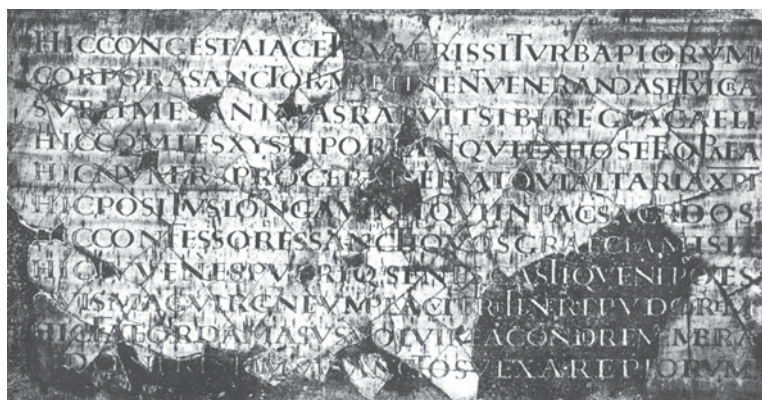


図1 ローマ サン・カリストゥスのカタコンベ〈教皇たちの地下聖堂〉  
教皇ダマススによる頌詩碑文（4世紀後半）

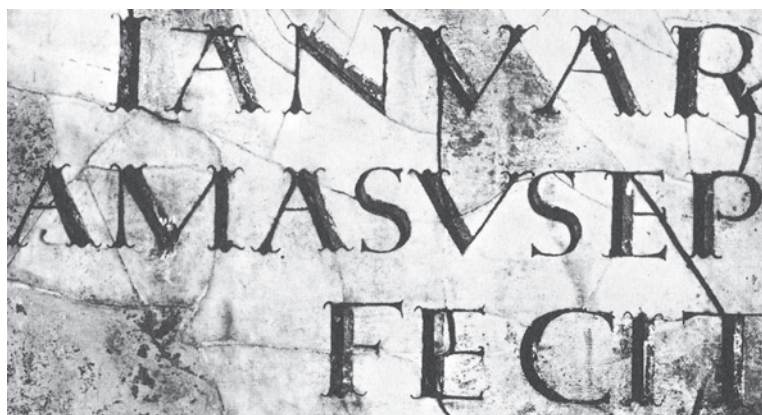


図2 ローマ プレテクスタートのカタコンベ 殉教者ヤヌアリウスに奉げられた  
教皇ダマススによる頌詩碑文，部分拡大（4世紀後半）

事に再生させ、そこに新たな精神を吹き込みながら、個性的で全く新しい記念碑文字を創り出すことに成功しているという<sup>16)</sup>。さらに、このような碑文字にのせて語られたダマススの頌詩そのものについてもフェルーアは、そこに、伝統的詩体構造（ヘクサメロン）やウエルギリウス型の描写法などに代表され

るラテン詩体の古典スタイルの復興を見ることができ、ダマススが、4世紀後半の都市ローマにまだ残っていた都会的で洗練された伝統的言語体系を、意図的に利用していると指摘する。

このように、石碑というひとつの媒体に向けられた教皇ダマススの具体的なこだわりを確認して行く時、彼が、古代末期の初期キリスト教領域で〈殉教者崇敬〉プロジェクトを展開する際に、その頌詩石碑の政治的・教育的機能に着目しながら、それらを〈メディア戦略〉の手段のように利用していたことに驚かされる。

キリスト教という新たな宗教に改宗したばかりの多くの信徒たちは、このようなダマススの石碑などローマ教会当局によって準備された殉教者の墓に降り行きながら、その地下空間で何を見て、いかなるメッセージを受け取ったのか。以下、教皇ダマススによる頌詩石碑を中心に据えて行われた〈殉教者崇敬〉プロジェクトの具体的痕跡を確認したい。

### 3. 教皇ダマススによる巡礼聖地の構築 — 〈教皇たちの地下聖堂〉

教皇ダマススによる頌詩石碑が設置された殉教者の墓のなかで最も重要なもののひとつは、間違いなく、アッピア街道沿いのサン・カリストゥスのカタコンベから発見された〈教皇たちの地下聖堂〉であろう(図3a)<sup>17)</sup>。1854年、G. B. デ・ロッシによって、同カタコンベ本体中央部の最古地区・地下第一層から発見されたこの〈地下聖堂〉は、ヴォルト型天井を備えた矩形プランの墓室で、一見して極めて重要な被埋葬者のためとわかるほど、特別な装飾と記念碑的要素を備えたものであった(図3b)。隣接して出土した殉教者・聖カエキリア(チェチリア)の墓室と連絡通路で繋がれたこの空間には、左右の側壁最下部に石棺を安置するための壁龕が4基、その上部にロクルスとよばれる棚型墓が三段にわたって計12基備えられている。

墓室内部から126個の断片が発見されたダマススによる頌詩碑文と(図1)、ロクルスを塞いでいた大理石蓋に刻まれた複数のギリシア語墓碑銘などから、



図 3a ローマ サン・カリストゥスのカタコンベ〈教皇たちの地下聖堂〉(4世紀後半)

発掘者デ・ロッシは、この墓室が、3世紀の殉教者を含むローマ司教と助祭のために用意されたもので、4世紀後半に教皇ダマスが二つの頌詩碑文を献上して新たに整備改修した重要な墓室であることをすぐに理解した。その後の調査によって、この墓室には、少なくとも9名の歴代ローマ司教、すなわち、ポンティアヌス(在任232-235)、アンテルス(在任235-236)、ファビアナス(在任236-254)、ルキウス(在任253-254)、シクストゥス2世(在任257-258)、ディオニュシウス(在任259-268)、フェリクス1世(在任269-274)、エウティキアヌス(在任275-283)が、また、その他、ヌミディアヌス、オッタートをはじめとする8名の助祭が埋葬されていたものと考えられている<sup>18)</sup>。





図3b ローマ サン・カリストゥスのカタコンベ〈教皇たちの地下聖堂〉  
1854年発掘時のスケッチ(デ・ロッシ)

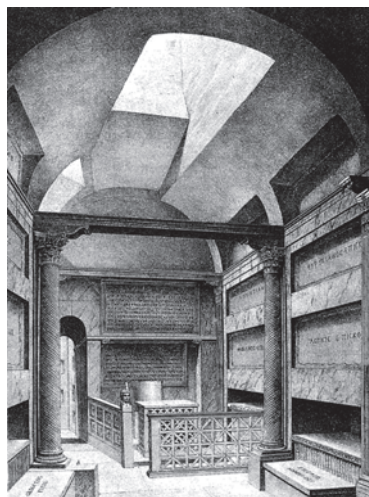


図3c ローマ サン・カリストゥスのカタコンベ〈教皇たちの地下聖堂〉  
復元予想図(デ・ロッシ)

デ・ロッシは、出土した大理石の装飾板や記念柱、柱頭などの断片、および床面に残された構造物の痕跡などをもとに、教皇ダマススの手によるこの墓室の復元図を残している(図3c)<sup>19)</sup>。それによれば、巡礼者の最も目を引く正面奥壁に、大理石板に刻まれたダマススによる二枚の頌詩碑文が上下に設置され、床や壁は大理石板で豪華に被覆装飾されていた。また、碑文の前には大理石製の祭壇が設置され、それを同じく大理石の装飾柵が囲み、祭儀のための聖域を形成する。また、墓室中央の左右には、コリント式柱頭を載せた二本の記念碑的な装飾円柱が基壇上に設置され、照明や祭具などを吊すためのアーキトレーヴを支えていた<sup>20)</sup>。

さらに、実際にこの墓室に足を踏み入れるとその大きさに驚かされるのだが、ヴォルト型天井の中央に巨大なルチェルナリーオ(採光用天窓)が開けられている。この墓室には更にもうひとつ小振りな天窓が墓室奥の左斜め上部に切られ、地上から差し込む光が祭壇上にスポットライトのように降り注ぐよう工夫

されていた。このような手の込んだ採光装置を設けながら暗闇の地下空間に光の演出効果を実現する、当時の巧みな技術と熱意にはあらためて驚かされる。地下通廊を抜けながらこの墓室に辿りついた巡礼者たちは、皆一様に、光と闇のコントラストのなかに浮かび上がる歴代ローマ司教たちの厳肅なこの墓室を、大きな驚きをもって眺めたことであろう。

ところで、1980年前後にこの〈教皇たちの地下聖堂〉周辺部で発掘調査を行った U. M. ファゾーラは、教皇ダマススによって行われたこの墓室の改修工事が、内部空間のみに留まらず、地上からその場所に至るまでの新たな〈巡礼経路〉の構築にまで及んでいたことを明らかにしている<sup>21)</sup>。それによればダマススは、地上からのアクセスに便利な幅の広い階段を新たに設けたほかに、おそらく、巡礼者の集団の流れを意識して、既存の別の階段を大きく改造しながら地上からの侵入経路を新たに増設している。

カタコンベ内部に入口専用の階段 (*descensionis*) と出口専用の階段 (*ascensionis*) とを設ける改修工事の記述は、カタコンベが巡礼聖地として盛んに機能していた7世紀頃までの教皇たちの在任中の記録として『リベル・ポンティフィカーリス』などにも時々登場するが<sup>22)</sup>、すでに4世紀後半のダマススが、大挙して訪れる巡礼者の渋滞緩和対策にまで配慮していたことが推測されて興味深い。そこには、ローマのカタコンベにおける〈殉教者崇敬〉プロジェクトに精力的に取り組む教皇ダマススの熱意が窺える。

元来、地下という劣悪な環境下の素朴な共同墓地でしかなかったカタコンベに、英雄的死を遂げた殉教司教や助祭たちを称揚するための新たな核となる〈聖地〉を構築し、そこを訪れる者たちに、ローマ教会の信仰の系譜の〈正当性〉を体現させながら伝えること、そこに教皇ダマススの最大の目的が存在している。記念碑装飾や光の演出といった建築的要素に、大理石に刻まれたダマススの頌詩碑文といった詩的・文学的要素を統合させて実現された〈教皇たちの地下聖堂〉は、まさにそのような、教皇ダマススの新たな教会政策の重要な「発信装置」の中核として機能していたのである。

#### 4. 殉教者墳墓の記念碑装飾 — 〈ヤヌアリウスの墓〉

〈教皇たちの地下聖堂〉のような墓室とは異なり、元来、簡素なロクルス（柵型墓）に埋葬された殉教者の単一墓に対しても、教皇ダマススは大理石に刻まれた多くの碑文を献呈し、それらの墓に記念碑装飾を施している。残念ながらそれらは、ゲルマン民族による度重なるローマ襲撃の際に、あるいは、略奪を恐れて7～9世紀の間に殉教聖人の遺骸が全てローマ市壁内の教会に移されてしまった際に、ほとんど破壊されるか略奪されてしまった<sup>23)</sup>。しかし、それらの幾つかの墓については、周辺部から発見されたダマススの碑文断片、大理石装飾の痕跡などに基づいて、墓の記念碑装飾の再現が試みられている。

F. トロッチェイは、アツピア街道の東側に位置するプレテクスタートのカタコンベ<sup>24)</sup>において、特別な装飾が施されていた痕跡のある墓を中心に調査を行い、4世紀初めの『殉教者暦』(*depositio martyrum*)<sup>25)</sup>を通してこの地下墓地に埋葬されたことが知られていた殉教者について、その墓の位置の確定を試みている<sup>26)</sup>。そのなかでトロッチェイは、特に、教皇ダマススによる碑文が献呈された殉教者ヤヌアリウスの墓（図4）、および、ローマ司教シクストゥス二世（在任257-258）の助祭のうち二人、フェリキッシムスとアガピトゥスの墓について、その記念碑装飾の復元を試みている。後者の二人の墓については、トロッチェイによる墓の位置確定に異論が提出されており、いまだ議論の余地が残るが、殉教者ヤヌアリウスの墓と装飾については、今日、説得力のある仮説として受け入れられている。というのも、カタコンベ内部から教皇ダマススがヤヌアリウスに奉げた碑銘の大理石片が複数出土しており、それらをもとに復元された碑文板全体の寸法が、トロッチェイが確定した墓に残された記念碑装飾の痕跡と、ほぼ完全に合致するからである。

トロッチェイの復元図によれば、ヤヌアリウスの墓は、本来、一基のアルコソリウム（アーチ型壁龕墓）のリユネッタ（奥壁）に掘られた簡素なロクルス（柵型墓）であったが、まず、周囲の外壁が広範囲にわたってレンガで被覆補強され、また、墓の前面上部にはレンガによる重厚な半円アーチが施されるこ

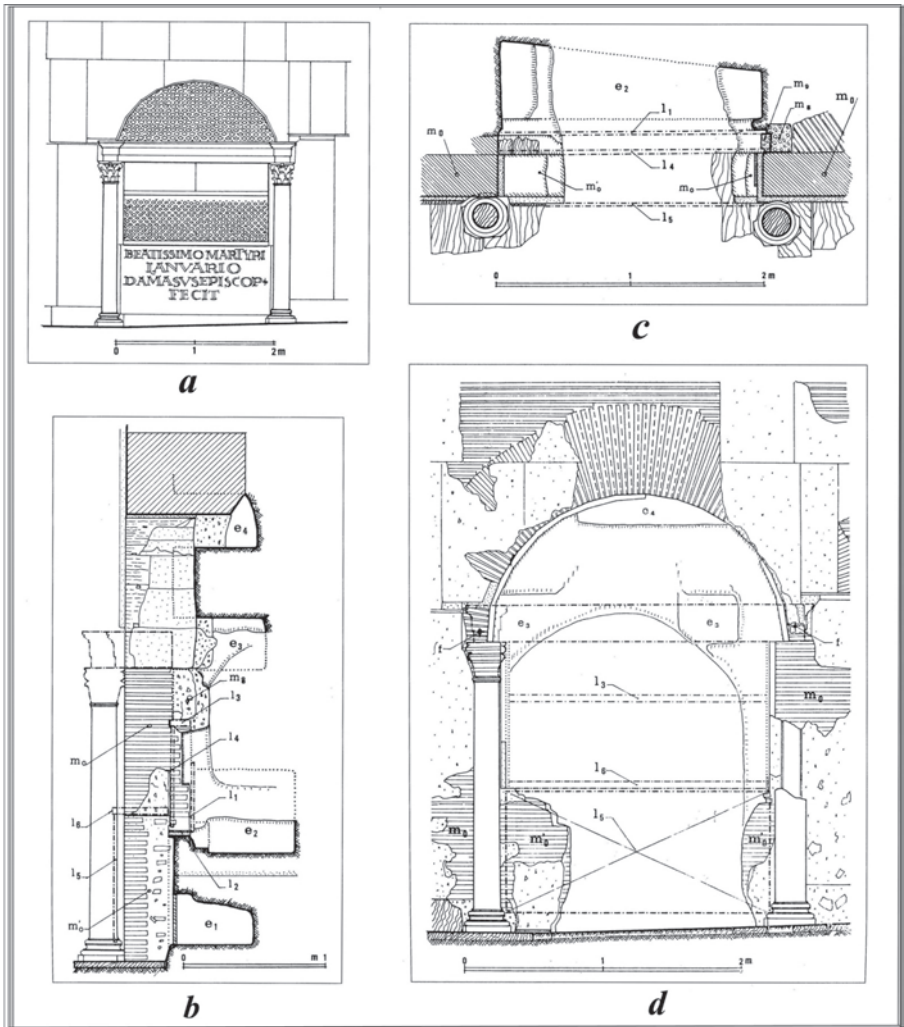


図4 ローマ プレテクスタートのカタコンベ 殉教者ヤヌアリウスの墓装飾：  
a. 復元予想図 (F.トロッティ) b. 断面図 c. 平面図 d. 正面図

とで、墓の記念碑化のための基礎と輪郭が形成されている。さらに、このレンガ壁の表面は白大理石の化粧板で覆われていた。この当時の様子は、今なお墓の左端から上部にかけて、大理石の一部がそのままの形で現場に残されていることから推測できる。また、アルコソリウム前の床は色大理石で舗装されていたことも、現存する大理石の痕跡から理解できる。さらに、アルコソリウムの左右には、柱頭を載せたポルフィド・ロッソ（暗紫色斑岩）の記念円柱が二本、基盤上に設置され、おそらくそれらが、装飾的なアーキトレーヴを支えていたと考えられている。また、これら二本の記念柱の間のアルコソリウム下部には、先述のダマススによる献呈文が刻まれた大理石板が嵌め込まれていた。加えて、大理石の装飾柵がダマススの碑文板上部のリュネッタ前面、および記念柱に支えられたアーキトレーヴ上のアーチ型の開口部に設置されていた。このような装飾が施された大理石の柵は、他のキリスト教カタコンベや非キリスト教的・世俗的遺跡など、古代世界で一般によく使用されたものであるが、ここでは、訪れた巡礼者が殉教者ヤヌアリウスの墓を傷つけることなく覗き込み、殉教者の遺骸との接近を実感できるよう、実際に、このような工夫や配慮が行われていたものと推測される。

同じように、ダマススの頌詩石碑の設置と同時に殉教者墳墓の記念碑化が行われた例としては、ローマはカシリーナ街道沿いのサンティ・ピエトロ・エ・マルチェリーノのカタコンベ内部から発見され、出土品した大理石片などをもとに詳細な研究が行われている殉教者ペトルスとマルケリーヌスの墓があげられる（図5）<sup>27)</sup>。J. グイヨンが提出した復元予想図によれば、祭儀の際に使用される大理石のメンソレ（祭儀台）が設置され、一部には凝った大理石のフリーズ装飾が施されるなど、先のヤヌアリウスの墓よりさらに豪華な記念碑的装飾が施されていたものと推測されている。

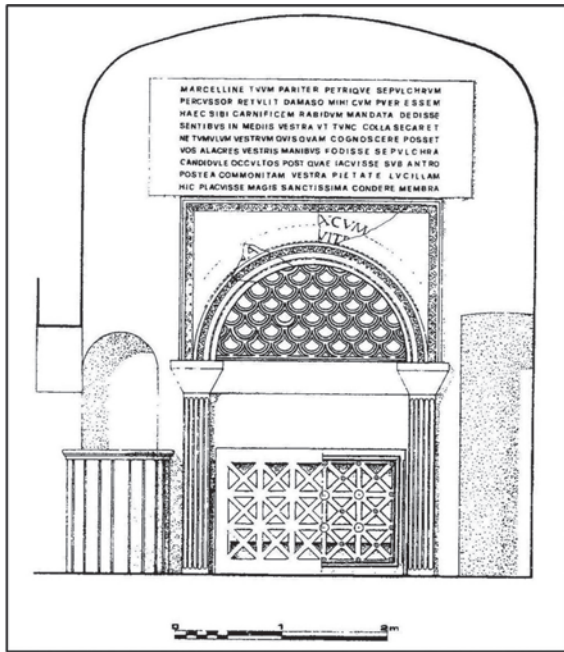


図5 ローマ サンティ・ピエトロ・エ・マルチェリーノのカタコンベ 殉教者ピエトロとマルチェリーノの墓復元予想図 (J. ゲイヨン)

## 5. 殉教者墳墓の〈殉教図〉—アキレウスの小円柱

教皇ダマススによって頌詩石碑が奉げられた殉教者の墓のなかには、4世紀の記念碑的装飾や祭儀施設の装飾に付された具体的な殉教場面の図像が出土している例がある。たとえば、アツピア歴史地区・アルデアティーナ街道沿いのドミティッラのカタコンベからは、殉教者ネレウスとアキレウスの殉教図が浮き彫りされた大理石の小円柱が発見されている(図6)。

この二人の殉教者については、後の時代の殉教伝などは存在するものの、その詳細は定かでない。教皇ダマススが彼らの墓に奉げた頌詩が、殉教に関する最も古い記述となっている。それによれば、ネレウスとアキレウスは法廷付き

の近衛兵であったが、何らかの残忍な任務を課せられたために、ある日突然その職務を捨て、それによる責め苦しみを喜びとして受け入れながら殉教したという<sup>28)</sup>。

ドミティッラのカタコンベからは浮き彫りが施された小円柱が2本出土した。その一方の彫刻はほとんど確認できなかったが、他の1本にアケレウスの殉教場面と思われる図像がはっきりと確認できた。そこでは、円柱表面の左側にサンダル履きのひとりの男性（頭部は欠損）が後ろ手に縛られ、その背後から、トゥニカを着てベルトを締め、頭にはパンノニア帽をかぶり肩にはクラミスを羽織った兵士と思われる男性が、右手に握った短剣を高く振りかざして迫っている。二人の間の背後には、十字架の上に載せられた殉教の栄光を称える花輪が刻まれている。また、この浮き彫り上部には *ACILLEVS* と刻まれた銘が読み取れる。そのことから、おそらく、出土したもう1本の円柱の彫刻には、同様に、ネレウスの殉教図が刻まれていたものと考えられている<sup>29)</sup>。

これらの小円柱は、1874年、デ・ロッシの発掘によって出土した聖堂内部から発見された（図7）<sup>30)</sup>。この聖堂は、カタコンベ内に埋葬された殉教者の墓を中心に、その周囲の地下通廊や多くの一般信徒の墓を破壊しながら建造した半地下型の三廊式聖堂で、身廊は約7mの高さがあり、左右の側廊との間は8本の大理石の柱で仕切られ、また、入口前にはナルテックス（玄関前室）を備えていた。今日、この聖堂は、床から発見された信徒の墓の年代などから、



図6 ローマ〈殉教者アケレウスの殉教図〉小円柱 ヴァチカン博物館蔵（ドミティッラのカタコンベ出土：4世紀）



図7 ローマ ドミティッラのカタコンベ 半地下聖堂（4世紀後半）

教皇シリキウス（在任384—399）の手によるものとの説が有力である<sup>31)</sup>。しかし、教皇ダマススの頌詩碑文の存在やアプシス周囲の壁の複雑な改修工事の跡などから、あきらかに、その前段階として、ダマススの手による墓の記念碑装飾、あるいは小規模な地下聖堂が存在していたものと考えられている<sup>32)</sup>。

そういうわけで、先のアキレウスの殉教図をもつ小円柱が、二人の殉教者の墓に対して行われた工事プロジェクトのどの段階に帰属するものであるか、いまだ明らかでない。R. カンツラーは、殉教図を含む出土した小円柱が、二人の殉教者を記念する祭壇の上に設置されたキボリウムの柱であったと考え、その復元予想図を描いている（図8）<sup>33)</sup>。それによれば、祭壇を囲む大理石の柵の前面に、教皇ダマススの頌詩碑文が嵌め込まれ、その上のキボリウムの屋根を支える柱に、先のアキレウスの殉教図が彫られた小円柱が使用されていたという。このカンツラーの予想図は十分な根拠に基づくものではないものの、教皇ダマスス、あるいはその後継者、教皇シリキウスによる殉教者の墓に対して行われた記念装飾の可能性として興味深い。ローマ教会による4世紀の〈殉教者崇敬〉の儀



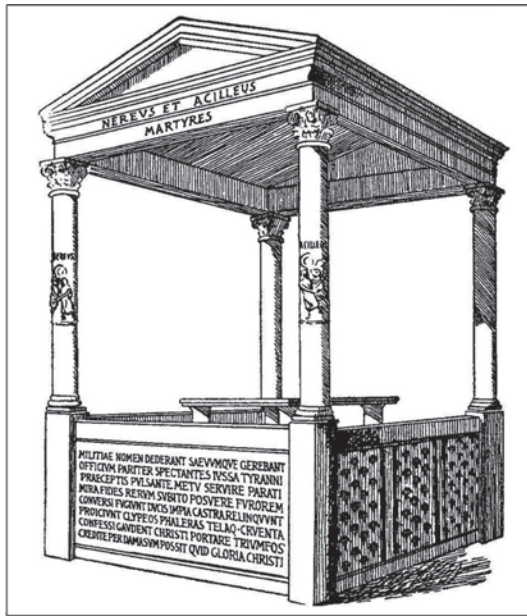


図8 ネレウスとアキレウスの墓の祭壇装飾 復元予想図 (R. カンツラー)

礼化プロジェクトは、教皇ダマススによる頌詩碑文設置といった文字を中心に据えた記念碑化のみならず、そこには、具体的な殉教図像が新たな伝達メディアとして確かに存在していたことを物語っている。時には、ダマススが奉げた頌詩そのものが描き出す殉教者の姿が、新たな殉教図像の発生を刺激する媒体として機能した可能性も否定できないだろう。

## 6. 聖アグネスの祭壇レリーフ

教皇ダマススが頌詩石碑を献呈した殉教者の墓について、4世紀の記念碑的装飾や祭儀施設の装飾に付された殉教者の図像例がもう一例存在する。それは、聖アグネスの像と考えられている大理石浮き彫りで、ローマ北東部のノメンターナ街道沿いに位置するカタコンベの同聖人の墓を飾っていたものと考えら



図9 ローマ サンタニエーゼ教会 〈聖アグネス〉像が彫られた祭壇裝飾断片（4世紀）

れている（図9）<sup>34）</sup>。

聖アグネスは、ローマの最も古い『殉教者暦』<sup>35）</sup>にその名が登場するほか、5世紀の『ヒエロニムスの殉教録』（*martirologium hieronymianum*）<sup>36）</sup>をはじめとする「殉教伝」や「巡礼案内」（*itinerari*）<sup>37）</sup>にその名が記載されており、ローマの殉教者のなかで最も重要な人物のひとりとして崇敬記念されていたことが窺える。迫害期にまで遡る他の殉教者の場合と同様に、その人物像については不確かなことが多いが、僅かな共通した情報としては、アグネスは12-13歳のまだ幼い少女であったにもかかわらず、ディオクレティアヌス帝（在位284-305）の迫害によって惨殺され殉教したという<sup>38）</sup>。

聖アグネスに奉げられた教皇 Damas の頌詩碑文の内容は、長い間、プルデンシウス（348頃-404以降）の「勝利の冠」（*Peristephanon*）に集録された写しなどを通してのみ知られていたが、1728年、彼女の墓の上に建てられたという聖堂内部の舗床大理石のなかに、現物が完全な姿で裏返しに使用されているところを発見された<sup>39）</sup>。その頌詩で Damas は、アグネスについて、彼女はまだ幼い娘であったが火刑の計り知れない恐怖に打ち勝ったこと、また、その髪

が聖なる肢体を包み人々の眼差しから隠したことを記し、最後に、ダマスの願いを聞き入れて欲しいと、彼自身の祈願で締めくくっている<sup>40)</sup>。

さて、聖アグネスと思われる人物の姿が刻まれた大理石浮き彫りは、1886年の発掘の際に、聖アグネスの聖堂入り口にある大階段の大理石板のなかから発見された<sup>41)</sup>。この浮き彫りは、高さ94cm、幅133cmに裁断された厚さ8cmの白大理石の断片で、右端には、柱の一部が、そしてその左には、記念柵を模した装飾模様が精巧に彫られ、その間に、少女の姿が両手を広げたオランス（祈り）の所作で彫り込まれている<sup>42)</sup>。

ローマ教会による〈殉教者崇敬〉政策は、頌詩石碑という文字媒体と大理石装飾による墓の記念碑化という建築要素を基本に据えながらも、同時にそこには、殉教者の姿や殉教場面といった図像要素も控え目ながら存在していたことが理解できる。そして、そのような図像もまた、ここでは、ダマスの頌詩が伝える殉教者の人物像やその称賛された死の物語を視覚的に捕捉しながら、巡礼者のための聖域を構築するダマスの政策の一端を担うものとして機能していたのである。

## 7. 〈殉教者崇敬〉の展開と影響 — 殉教者記念聖堂と〈レトロ・サンクトス〉

教皇ダマスによって実施された〈殉教者崇敬〉政策は、すでに早い段階から信徒のあいだに存在していた病気治癒や安寧の祈願といった、殉教者に対する彼らの素朴な信心を確実に絡め取りながら、4世紀後半のキリスト教領域に〈殉教聖人〉と〈巡礼聖地〉という新たな精神的・物理的中核を公式に形成した。そしてそれは、共同体内部の信徒自信の埋葬領域にも具体的な変化と影響をもたらしている。たとえば、カタコンベ内部に出現した〈レトロ・サンクトス〉(retro sanctos)<sup>43)</sup>とよばれる新たな領域の展開と、カタコンベの地上に建設された〈殉教者記念聖堂〉<sup>44)</sup>の内部への信徒の埋葬の集中がその好例といえる。

どちらも、その背後に、殉教者の墓の近くに埋葬されることで神への〈執り

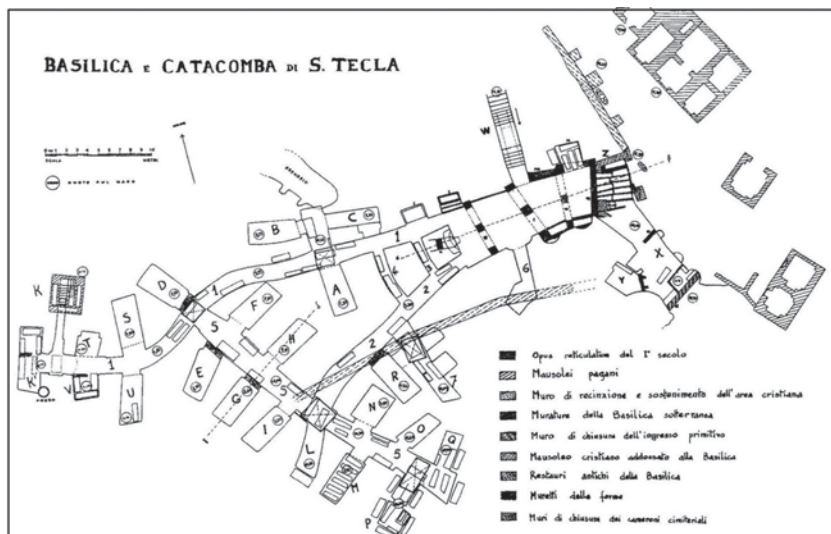


図10 ローマ サンタ・テクラのカタコンベ：殉教者の墓がある地下聖堂（中央）から左側に二本の地下通廊が伸びて新たなくレトロ・サンクトス〉（埋葬特区）を形成

成し〉の恩恵を享受できるとする信徒の素朴な願いや信心が存在すると考えられるが、特にこの現象は、ダマスの〈殉教者崇敬〉政策以降、その傾向が強化されている。カタコンベ地誌学の第一人者フィオッキ・ニコライによれば、コンスタンティヌス帝治世期から急激に増大するカタコンベの地下通廊の拡大傾向は、ダマスの在任期間以降急に緩慢になるが、そこには、上記の二つの現象が関係しているという<sup>45)</sup>。すなわち、人々の自らの墓への関心が、カタコンベという無限に拡大可能な地下墓所のどこでもよしとする任意の場所への埋葬から、〈殉教者〉を中心とする新たな特定の〈聖域〉周辺部に限定した埋葬へと大きく変化している。

〈レトロ・サンクトス〉は、具体的には、殉教者の墓の背後に回り込むように新たな地下通廊を延伸掘削したり、密集して埋葬できるよう特別な構造の墓を工夫しながら、殉教者の墓の周囲に形成された特殊領域であった（図10）。そこには、豪華で手の込んだ墓や墓室が多く、共同体内部の特に裕福な信徒や、

場合によっては殉教者の墓の記念工事のための費用の寄進などを通して、特別な権利を得た者の領域であった可能性も考えられている。そのような〈埋葬特区〉の代表例としては、たとえば、先に言及したドミティッラのカタコンベ内部、殉教者ネレウスとアキレウスを記念して彼らの墓に建てられた半地下聖堂のアプシス背後から発見された、複数の墓室によって構成された領域があげられる<sup>46)</sup>。また、すでに言及したサン・カリストゥスのカタコンベの〈教皇たちの地下聖堂〉周辺部や同カタコンベ内のローマ司教コルネリウス（在任251-253）、ガイウス（在任283-296）の墓周辺部もまたその代表例と考えられている<sup>47)</sup>。なかでも、ローマの殉教司教であったガイウスの墓室の真後ろからは、内部に大理石装飾（*opus sectile*）やモザイクなど極めて豊かな装飾を備えた墓室が出土している<sup>48)</sup>。また、コモディッラのカタコンベの殉教者フェリックスとアダクトゥスの墓の周辺部からも、副葬品を伴う比較的裕福な墓が密集した地下通廊や、殉教者の壁画図像をともなった墓室が発見されている<sup>49)</sup>。その他にも、カレポディオのカタコンベの殉教者カリストゥスの墓の周辺部<sup>50)</sup>、マルクス・マルケリアヌス・ダマスのカタコンベの〈地下聖堂〉周辺部など<sup>51)</sup>、その例は枚挙にいとまがない。

一方、殉教者記念聖堂については、殉教者の墓の近くの地上に建てられたもの、あるいは、殉教者の墓をそのまま取り込むような完全な地下聖堂<sup>52)</sup>、さらには半地下型聖堂<sup>53)</sup>など様々なタイプが確認されている<sup>54)</sup>。たとえば、先述のサンタニエーゼのカタコンベでは、聖アグネスの墓を祭壇下に取り込んだ記念聖堂が早い時期に既に存在していた<sup>55)</sup>。また、カタコンベの地上には、コンスタンティヌス帝の娘コスタンツァの寄進によって建てられたというサークル型の記念聖堂が4世紀中頃に建てられている（図11）<sup>56)</sup>。これらの殉教者記念聖堂は、埋葬が禁止されていた市壁内に建てられたキリスト教聖堂とは異なり、その内部に一般の信徒の埋葬を行うことをひとつの目的とした、いわゆる葬礼型聖堂であった<sup>57)</sup>。たとえば、アッピア地区のカタコンベ地上に建てられたサン・セバステアノー聖堂（聖使徒聖堂：*basilica apostolorum*）<sup>58)</sup>や、近年発見され現在も発掘調査が継続中であるアルデアティーナ街道沿いの教皇マルクス

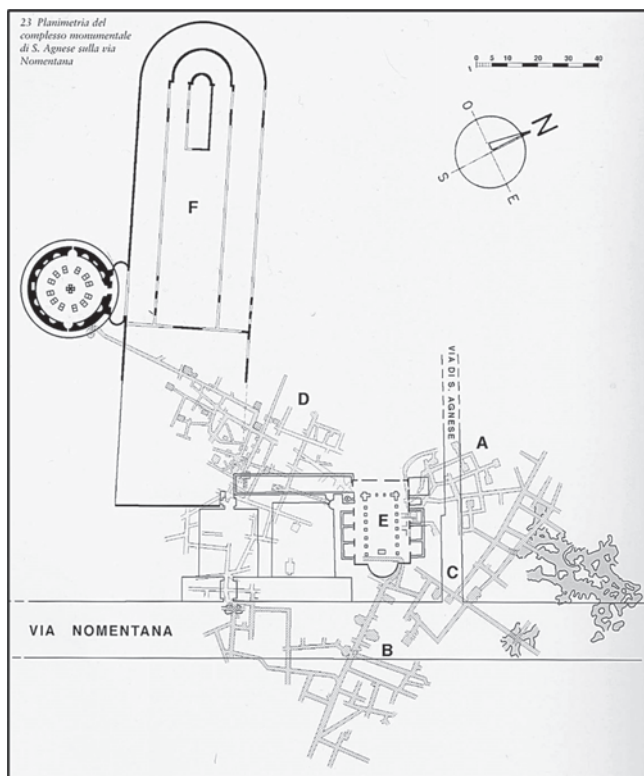


図11 ローマ サンタニエーゼのカタコンベ 平面図：〈聖アグネスの墓〉の上に建てられた聖堂 (E) とコスタンツァの靈廟が附属したサークル型大聖堂 (F)

の聖堂<sup>59)</sup>などに見るように、その内部には無数の信徒の墓がひしめき合っており (図12)、前述のような、殉教聖人の墓の少しでも近くに埋葬されることを望む、当時の一般信徒たちの篤い〈殉教者崇敬〉を読み取ることができる。

カタコンベの殉教者を記念して建てられた地上の殉教者記念聖堂は、このような信徒の墓のための埋葬空間であると同時に、当然ながら、その地を訪れる多くの巡礼者たちを収容し、殉教者に奉げる記念のミサを行うための祭儀空間として機能した。したがって、地上のこの種の聖堂の構造も、地下の殉教者の



図12 ローマ 教皇マルクスのサークル型聖堂 床下を埋め尽くす信徒の墓 4世紀

墓の位置を強く意識しており、その場所を詣でる巡礼者への便宜を考慮したものがみられる。たとえば、ポルトゥエンセ街道沿いのジェネローザのカタコンベの地上からは、ダマススによって建立された三廊式バシリカの祭壇と後陣の一部が発見されているが、そのアプシスには、背後に存在するカタコンベの殉教者の墓室を覗き見ることが可能なように、窓状の開口部 (*fenestella*) が設けられている<sup>60)</sup>。また、大掛かりな例としては、サンティ・ピエトロ・エ・マルチェリーノのカタコンベの地上の記念聖堂のように、巡礼者が地下の殉教者の

墓を覗き込めるような吹き抜けの構造が存在していた可能性が指摘されている<sup>61)</sup>。

## まとめ —〈殉教者崇敬〉政策とキリスト像の〈権威化〉

4世紀、ローマ教会当局によって行われた〈殉教者崇敬〉政策に基づくプロジェクトの痕跡について、主に教皇ダマスの頌詩石碑が設置された殉教者の墓とその周辺部を中心に具体的事例を個別に確認してきた。そこからは、頌詩文体や石碑に刻まれた〈フィロカルス文字〉に確認されるような、細部にまで熟慮された文字媒体によるダマスの〈メディア戦略〉の痕跡、大理石板や円柱など装飾・建築要素による墓の記念碑化の痕跡、また、〈ルチュルナリーオ〉（天窓）や地上と地下を結ぶ新たな階段の設置による〈巡礼経路〉の整備、さらには、殉教者の墓室やその周囲の空間に構築された殉教者記念聖堂の建設など、この「政策」が、4世紀の地下墓所で多様な手段を講じて実現された大掛かりな複合的プロジェクトであったことが十分に理解される。そして、そのための全ての要素が、過去の迫害期に英雄的死を遂げたローマの殉教者を称揚するという、ローマ教会当局の唯一の目的のために集中している。教皇ダマスが、ローマのキリスト教葬礼領域に、そのような信仰的・霊的、そして教会政治的「核」となるための新たな〈聖地〉を構築しようとしたことは、考古学的見地からも疑いようがない。

このようなダマスの「政策」は、確実に、当時の新たな改宗者や巡礼者たちの心を捉えたようである。一般信徒の埋葬が、ダマスの在任期以降、殉教者の墓の周辺部や殉教者記念聖堂内部に急激に集中して行くという具体的現象が、その事実を物語っている。同時に、そこからは、過去の殉教者（あるいはその遺骸）の存在が、救済のための神への〈執り成し〉として働くとする信徒の素朴な〈信心〉が広く浸透し、それを、教会当局が公に容認していたという当時の状況が鮮やかに浮かび上がってくる。カタコンベ内部に出現する大掛かりな〈埋葬特区〉（レトロ・サンクトス）の新たな構築や、信徒の埋葬施設としての大規模な殉教者記念聖堂の建設が、この事実を証言している。





図13 ローマ サンティ・ピエトロ・エ・マルチェリーノのカタコンベ  
〈諸聖人の墓室〉 天井画・中央部

本稿で確認してきたこのような考古学的痕跡に基づく殉教者の称揚と〈崇敬〉に関する教会当局の「政策」を、筆者が問題提起で述べた〈善き牧者キリスト〉像の消失とキリスト図像の権威化という文脈のなかに位置づけ捉えるとき、そこに新たな意味が存在していることに気づかされる。すなわち、そこでは、過去の殉教者が一般信徒にとって〈聖人〉としてより高みに称揚されることによって、救済者キリストと信徒との間に位置する新たな〈中間的存在〉として殉教者たちが明確に序列化されている。それは、殉教者の称揚という「政策」の当然の帰結とも言えるだろう。

ローマのサンティ・ピエトロ・エ・マルチェリーノのカタコンベから出土した墓室を飾る壁画は、そのような序列化された殉教者像を示す具体的作例という視点からも興味深い(図13)<sup>62</sup>。それは「諸聖人の墓室」とよばれる墓室の天井面いっばいに描かれた壁画で、4世紀末から5世紀初めのものと考えられ



図14 ローマ サンティ・ピエトロ・エ・マルチェリーノ  
のカタコンベ 〈善き牧者キリスト〉 天井画

ている。そこには、画面が上下二段に大きく分割され、上段中央に威厳のある王としての衣を纏ったキリストが玉座に着き、その左右両脇には、左に使徒ペテロ、右にパウロの姿がキリストに寄り添うように大きく強調して描かれている。一方、その下段には、上段の人物像よりも明らかに小さく控え目に4人の殉教者たちが、小さな丘の上に立つ「神の子羊」に向かって、片手を高らかに挙げた称揚のポーズで描かれている。ここでは、まず、上下段の中央にそれぞれ「キリスト」と「神の子羊」が〈足台〉と〈丘〉によって高みに位置づけられ、その他の登場人物たちが、上下段の分割と人体高の大小によって明確に、救済者—使徒—殉教者、そしてその天井画のもとに埋葬された、あるいは下から天井画を見上げる信徒たちというように序列化されている。

一方、3～4世紀を通じて人気のあった羊と羊飼いという素朴な関係のモチーフに基づく〈善き牧者キリスト〉の図像(図14)では、信徒に寄り添う同

伴者としての救済者の近しい関係が強調されており、そこには、〈中間的存在〉を介しなければ実現されない神や救済者への〈執り成し〉の必要性は微塵も感じられない。

このように、4世紀後半の教皇ダマススの〈殉教者崇敬〉プロジェクトにみられるローマ教会当局による新たな「政策」は、国家権力との関係を深めるキリスト教に外部から侵入してきた皇帝美術の影響とは別に、当時の教会内部から発生した新たな動きと変化によって、結果的に、キリスト像の〈権威化〉が加速された可能性を物語っている。

## 註

- 1) 〈善き牧者キリスト〉像の消失問題については、以下のラムゼイの研究ノートおよび拙稿を参照されたい：B. Ramsey, “A note of a disappearance of the Good shepherd from early christian art”, in *Harvard theological review*, 77, 1983 (1985) 375-378；山田 順, 「キリスト権威図像の出現 — ドミティッラのカタコンベ・墓室 39 (NR) の図像プログラムを中心に —」, 西南学院大学『国際文化論集』第17巻・第2号 (2003年) pp.105-153；「〈善き牧者キリスト像〉の消失プロセス — ドミティッラのカタコンベ壁画を中心に —」, 『キリスト教史学』第63集 (2009年) pp.108-130.
- 2) 山田 順, 「キリスト権威図像…」 *op.cit.* pp.125-131.
- 3) *ibid.* pp.132-144.
- 4) *ibid.* pp.112-118, 132-140.
- 5) 教皇ダマススについては以下を参照：L. Duchesne (cura), *Le Liber Pontificalis*, I-II, Paris 1886-92, pp.212-215；A. Ferrua. S. I., “Filocalo, l’amante della bella scrittura”, in *Civiltà Cattolica*, 90 (1939) pp.35-47；*id.*, *Epigrammata Damasiana*, Città del Vaticano, 1942；C. Carletti, *Damaso e i martiri di Roma*, Città del Vaticano 1985；*Saecularia Damasiana*, Atti del Convegno Internazionale per il XVI centenario della morte di papa Damaso I (11-12-384-10/12-12-1984), promosso dal Pontificio Istituto di Archeologia Cristiana, Città del Vaticano 1986；L. Spera, *Interventi papali nei santuari delle catacombe romane: osservazioni dalla Roma sotterranea di G. B. de Rossi*, in *Acta XIII Congressus Internationalis Archaeologiae Christianae*, I, Città del Vaticano - Split 1998, pp.303-320；C. Carletti, s.v. *Santo Damaso I*, in *Enciclopedia dei Papi*, I, Roma 2000, pp.349-371；G. バラクロウ, 藤崎衛 (訳), 『中世教皇史』 (八坂書房 2012年) pp.29-41.
- 6) ダマススの在任期間については次の文献を参照：*ibid.* pp.38-40；Carletti, s.v. *Santo Damaso... op.cit.*

- 7) *ibid.* p.370
- 8) Duchesne, *op. cit.*, I, pp.212-215.
- 9) *ibid.* p.212 ; Ferrua, *Epigrammata... op. cit.* p.57.
- 10) Duchesne, *op. cit.*, I, p.291.
- 11) Carletti, *Damaso e i martiri...op.cit.* p.5 ; Ferrua, *Epigrammata... op. cit.* p.41, 5-6.
- 12) *de viris illustribus*, 103, p.208 ; Carletti, *s.v. Santo Damaso I... op.cit.* p.349.
- 13) *ibid.* p.350-351.
- 14) Carletti, *Damaso e i martiri...op.cit.* p.8.
- 15) Carletti, *s.v. Santo Damaso I... op.cit.* p.357.
- 16) Carletti, *Damaso e i martiri...op.cit.* p.8.
- 17) 〈教皇たちの地下聖堂〉 (*cripta dei Papi*) については以下を参照 : P. Testini, *Archeologia Cristiana*, Bari 1980, p.208-214 ; U. M. Fasola, “Santuari sotterranei di Damaso nelle catacomb romane. I contributi di una recente scoperta”, in *Saecularia Damasiana*, Città del Vaticano 1986, pp.176-224 ; V. Fiocchi Nicolai, F. Bisconti, D. Mazzoleni, *Le catacombe cristiane di Roma*, Città del Vaticano 1998, p.34, fig.32 ; V. Fiocchi Nicolai, J. Guyon, *Origine delle catacomb romane*, Città del Vaticano 2006, pp.143-156.
- 18) Testini, *op.cit.* pp.210-211.
- 19) Pontificia Commissione di Archeologia Sacra (cura), *Giovanni Battista de Rossi e le catacombe romane*, Città del Vaticano, 1994, p.18, 121, fig.74.
- 20) *ibid.* p.212.
- 21) Fasola, *op.cit.* pp.185-193.
- 22) Duchesne, *op.cit.* I, pp.181-182.
- 23) Carletti, *Damaso e i martiri...op.cit.* p.5.
- 24) プレテクスタートのカタコンベについてはスペラによる以下の最新の文献に詳しい : L. Spera, *Il complesso di Pretestato sulla via Appia*, Città del Vaticano 2004.
- 25) Testini, *op.cit.* p.18-20.
- 26) F. Tolotti, “Ricerca dei luoghi venerati nella Spelunca Magna di Pretestato”, *Rivista di Archeologia Cristiana* 56 (1977) pp.7-102.
- 27) Fiocchi Nicolai, J. Guyon, *op. cit.* pp.228-237.
- 28) A. Amore, *I martiri di Roma*, Roma 1975, p.200 ; U. M. Fasola, *La catacomba di Domitilla e la basilica dei martiri Nerone ed Achilleo*, Città del Vaticano 1980, p.8.
- 29) Testini, *op.cit.* pp.201-206 ; Pontificia Commissione di Archeologia Sacra (cura), *Giovanni Battista de Rossi e le catacombe romane*, Città del Vaticano 1994, pp.150-151, fig. 104 ; V. Fiocchi Nicolai, *Le catacombe cristiane...op. cit.* p.106, fig. 120 ; S. Ensoli, E. La Rocca (cura), *Aurea Roma, dalla città pagana alla città cristiana*, Roma 2000, p.595, No.291.
- 30) Pontificia Commissione di Archeologia Sacra (cura), *op.cit.* pp.142, 150-151.

- 31) ドミティッラのカタコンベ研究で知られる Ph. ペルゴラはこの半地下聖堂をダマスに帰属するものとしている：Ph. Pergola, *Le catacomb romane. Storia e topografia*, Roma 1997, p.214.
- 32) Fasola, *op.cit.* pp.16-17.
- 33) *ibid.* p.18, fig. 6.
- 34) A. P. Frutaz, *Il complesso monumentale di Sant' Agnese e di Santa Costanza*, Roma-Città del Vaticano 1976 ; Carletti, *Damaso e i martiri...op.cit.* pp.39-42 ; Ensoli, *op.cit.* p.601, No.299.
- 35) Testini, *op.cit.* p.18 : XII. KAL. FEB. Agnetis, in *Nomentana*
- 36) *ibid.* p.20-21.
- 37) *ibid.* p.26-26.
- 38) Amore, *op.cit.* pp.78-80.
- 39) Carletti, *Damaso e i martiri...op.cit.* p.39-42.
- 40) *ibid.* p.40.
- 41) Frutaz, *op.cit.* p.46.
- 42) Ensoli, *op.cit.* p.601.
- 43) 〈レトロ・サンクトス〉については以下を参照：V. Fiocchi Nicolai, *Strutture funerarie ed edifici di culto paleocristiani di Roma dal IV al VI secolo*, Città del Vaticano 2001, pp.84-89 ; Fiocchi Nicolai (et alt.), *Le catacombe cristiane...op.cit.* pp.52-57.
- 44) 〈殉教者記念聖堂〉については以下を参照：R. Krautheimer, *Profilo di una città, 312-1308*, Roma 1981, pp.45-71 ; *ibidem. Architettura paleocristiana e bizantina*, Torino, 1986, pp.34-57, 97-101 ; Fiocchi Nicolai, *Strutture funerarie...op.cit.* pp.49-62.
- 45) *ibid.* p.88-89.
- 46) Fiocchi Nicolai (et alt.), *Le catacombe cristiane...op.cit.* pp.52-53, fig. 60 ; *ibidem, Strutture funerarie...op.cit.* pp.86-87.
- 47) *ibid.* p.75.
- 48) *ibid.* p.88, tav. XXVIIb ; Fiocchi Nicolai (et alt.), *Le catacombe cristiane...op.cit.* p.55, fig. 62.
- 49) Fiocchi Nicolai, *Strutture funerarie...op.cit.* p.88, fig. 80, A, tav. XXa.
- 50) *ibid.* p.88-89.
- 51) *ibid.* p.76, fig. 50, 88 ; Fiocchi Nicolai (et alt.), *Le catacombe cristiane...op.cit.* pp.51-52
- 52) 例えばヒッポリトゥスのカタコンベの地下聖堂, コモディッラのカタコンベの地下聖堂, サンティ・ピエトロ・エ・マルチェリーノのカタコンベの地下聖堂などが挙げられる： *ibid.* pp.58-62, figg. 65, 66.
- 53) すでに言及したドミティッラのカタコンベの半地下聖堂がその代表例として挙げられる： *ibid.* p.63, fig. 72.

- 54) R. Krautheimer, *Corpus Basilicarum Christianarum Romae. Le Basiliche paleocristiane di Roma (sec. IV-IX)*, I-V, Città del Vaticano 1937-1980 ; U. M. Fasola, *La catacomba di Domitilla e la basilica dei martiri Nerone ed Achilleo*, Città del Vaticano 1980 ; Ch. Pietri, *Roma christiana. Recherches sur l'Eglise de Rome, son organisation, sa politique, son idéologie de Miltiade à Sixte III (311-440)*, I-II, Rome 1976 ; Fiocchi Nicolai, *Strutture funerarie...op.cit.* p.49-62 ; M. M. Cianetti et C. Pavolini (cura), *La basilica costantiniana di Sant'Agnese. Lavori archeologici e di restauro*, Roma 2004.
- 55) *ibid.* p.54-57.
- 56) *ibid.* p.10-14.
- 57) 古代ローマの十二表法の厳しい規定 (*pomerium*) により市壁内部に遺体を埋葬することは許されなかった。したがって、4世紀前半に建立された聖堂のなかでも市壁内に建てられたサン・サルバトーレ聖堂(ローマ司教座聖堂)、サンタ・クロッチェ・イン・ジェルザレンメ聖堂(エルサレムの聖十字架聖堂)などは、当然ながら葬礼型バシリカではなかった。
- 58) <*basilica apostolorum*>についてはニエドゥによる以下の最新の文献に詳しい : A. M. Nieddu, *La Basilica Apostolorum sulla via Appia e l'area cimiteriale circostante*, Città del Vaticano 2009.
- 59) この聖堂についてはフィオッキ・ニコライによる以下の文献に詳しい : V. Fiocchi Nicolai, "La nuova Basilica Circiforme della via Ardeatina", in *Rendiconti della Pontificia Accademia Romana di Archeologia*, LXVIII (1995-96) pp.69-233.
- 60) Pontificia Commissione di Archeologia Sacra (cura), *op.cit.* pp.132-135, figg. 86-89.
- 61) *Saecularia Damasiana...op.cit.* pp.238-244, fig. 10.
- 62) Fiocchi Nicolai (et alt.), *Le catacombe cristiane...op.cit.* pp.192-131, fig. 144 ; F. Bisconti, "Progetti decorativi dei primi edifici di culto romani : delle assenze figurative ai grandi scenari iconografici", in *Ecclesiae Urbis* (2000) pp.1633-1658 ; M. Andaloro, *L'Orizzonte tardoantico e le nuove immagini 312-468*, Roma 2006, pp.188-189.

## 図版クレジット

- 図 1 A. Ferrua S. I., C. Carletti, *Damaso e I martiri di Roma — anno damasi saeculari XVI*, Città del Vaticano, 1985, p.19.
- 図 2 *ibid.* p.35. 筆者が一部を拡大
- 図 3 a V. Fiocchi Nicolai, F. Bisconti, D. Mazzoleni, *Le catacombe cristiane di Roma*, Città del Vaticano, 1998, p.34.
- 図 3 b Pontificia Commissione di Archeologia Sacra (cura), *Giovanni Battista de Rossi e le catacombe romane*, Città del Vaticano, 1994, p.121, fig. 74.
- 図 3 c *ibid.* p.121, fig. 75.

- 図4 a F. Tolotti, “Ricerca dei luoghi venerati nella Spelunca Magna di Pretestato”, *Rivista di Archeologia Cristiana* 56 (1977) p.69, fig. 29.
- 図4 b-d *ibid.* pp.63, 65, 67, figg. 24, 25, 27.
- 図5 J. Guyon, *Le cimetière aux deux Lauriers, recherches sur les catacombs romaines*, Roma, 1987, p.384, fig. 224.
- 図6 Fiocchi Nicolai, *op. cit.* p.106, fig. 120.
- 図7 *ibid.* p.63, fig. 72.
- 図8 V. Fiocchi Nicolai, *Strutture funerarie ed edifici di culto paleocristiani di Roma dal IV fino al VI secolo*, Città del Vaticano, 2001, fig. 55.
- 図9 S. Ensoli, E. La Rocca (cura), *Aurea Roma, dalla città pagana alla città cristiana*, Roma, 2000, p.601, fig. 299.
- 図10 Fiocchi Nicolai, *Strutture funerarie...*, *op. cit.* p.77, fig. 51.
- 図11 Fiocchi Nicolai, *Le catacombe romane...*, *op. cit.* p.28, fig. 23.
- 図12 Fiocchi Nicolai, *Strutture funerarie...*, *op. cit.* p.77, fig. 51.
- 図13 Fiocchi Nicolai, *Le catacombe romane...*, *op. cit.* p.131, fig. 144.
- 図14 J. Wilpert, *Le pitture delle catacomb romane*, Roma, 1903, tav. 63-1.